



# 乳魔の屋敷

巨乳サキュバスの誘惑！

文・坂下一  
挿絵・天音るり

目次

序	妖艶なる貴婦人 <sup>サキュバス</sup>	……	p 3
1	双子の退魔戦士	……	p 5
2	古都・フイーニス	……	p 14
3	選択	……	p 23
4	誘い	……	p 32
5	乳魔	……	p 41
6	乳浴	……	p 51
7	兄の欲望 乳魔巨乳責め	……	p 72
8	弟の嫉妬 寸止め地獄	……	p 94
9	墮落	……	p 111
10	双子の淫魔戦士	……	p 127

## 序・妖艶なる貴婦人

サキュバス

「はあ……はあ……」

「さあ、退魔戦士様、どうなさいますか？」

男の荒い息と落ちついた女の声。

男は浅く激しい呼吸を続けながら、目の前にある扉を見やった。

大きい部屋だった。この豪邸に似つかわしい部屋。ここから俺は出ていく事ができる。

出ていく自由が与えられている。与えられてしまっている。

どうするべきかはわかっていた。この女、いや悪魔は危険すぎる。プライドを捨て今すぐこの屋敷を飛び出し、そしてありとあらゆる応援をかき集め再びこの淫魔に戦いを挑むのだ。一人ではだめだ。二人、三人、最低五人は必要だ——

凄腕の対淫魔戦士五人をかき集めなければこの淫魔には勝てない……一匹狼を貫きとおしてきた戦士にとっては、この考えは自分の全否定にも等しいものだった。

だが、それしかないとなれば確信していた。この淫魔との戦いの中で味わってきたモノを思い出せば、それしかないとなれば、男の中に居る戦士は素直にうなずいていた。

「すごい汗ですわ。大丈夫ですか？」

そんな事を言われ、男は汗をぬぐった。ぬぐった事で、自分が久しぶりに服を着ている事に気がついた。淫魔は天蓋付きキングサイズのベッドにゆったりと腰掛け、長い足を組み膝の上で手を組んでいた。

ドアから振りかえった事で、雲の無い夜の月光に照らされる淫魔が写った。二本の角と黒い翼、尻尾を身に付けた以外は、人間の女と差はなかった。

いや、美しかった。淫らだった。淫魔にしかできない曲線美を見せつける肉体の陰影が、男を捉えて離さなかった。

匂い立つ淫媚な色香が、思考を曇らせてくる。美しさに満ち、永い時を経て若さと艶を完璧な具合に混ぜ合わせた顔立ち。戦士が必死に隠す欲望を知り尽くした視線。

すぐに視線をドアに戻すが、その姿が目には焼き付いて離れない。走馬灯のように思い出してしまう。この淫魔との戦いを。

どくん、と心臓が脈打った。うずいて仕方がなかった。

男の中にある、オスが、喚いている——何もかも捨てろ、と。そして暴れ狂いはちきれそうな己の欲望を捧げろと——

目をつむり、戦士が立ちすくむ間、淫魔は何も言わなかった。

——イキたい。尊厳も使命も何もかも捨てて、気持ちよくなりたい……！

男が目を開けた時、視界にあったのは月光に照らされる淫魔の姿だった。

——乳魔。踊る青き宝石。ブルー・ソファイア優しき女主人ミストレス

乳魔という二つ名は心の底から思い知らされたが、他の物は、淫魔になぜそんな二つ名が付いているのか、戦士はわからなかった。だが月光に照らされた艶やかな姿を見て、やっとわかった。

なんて優しい瞳なんだ。この女神に仕える事ができれば、後は何も……

「あ……お、オ……お……」

戦士の口が開かれていく。バクバクと自分の心臓の音が聞こえた。声が震える。汗だらの額。

月光を浴び、金髪を青く煌めかせた妖艶な淫魔は、小さく唇を歪めて微笑んだ。

## 1 戦士

「兄さん、次の街ももうすぐだね」

「ああ、そうだな！」

田畑が続くのどかな道で、二人の少年——ケンとレンは歩き続けていた。

二人は腰に剣を佩<sup>ひ</sup>びる事、胸に教会<sup>カウチ</sup>よりの証明<sup>シメイ</sup>をぶら下げている事以外は至<sup>いた</sup>って普通。まだ二十歳にもなっていないだろう。

「この先の街か……」

弟のレンは雲間から照らされる太陽に目を細めながら呟いた。

「ああ。だが、この地域じゃ大物はビンゴブックに乗ってないな」

「だからこそ、気になるよね」

軽い調子で会話しながら、街に続く小路に沿って森へ進む。

道からはずれると鬱蒼と茂っているが、近くの木々は背も低く圧迫感もない。

「この調子でいけば夜になる前には着けるな」

兄のケンの言葉にレンも頷き、額の汗をぬぐった時だった。

「た、助けてください！」

「っ?!」

女の叫ぶような声に、二人は即座に剣を抜き放った。黒き瞳が、赤髪の下で煌めく。

「大丈夫か！」

ケンが即座に跳び出し女性と森の間に立ち、弟は崩れ落ちる女性を支えた。

「どうしたんですか!？」

「はあ……あちらで……森の奥で……盗賊に……」

「わっ……とと」

彼女の話しを聞きながらも、レンは密着する女性の柔らかな肉体と甘い香りに頭がくらつとした。

「大丈夫ですよ」

女性の背中を撫でた。黒い髪は肩の所で整えられていて、ごく普通の村娘という服装だ。

「盗賊なんていないみたいだぞ」

ケンが辺りを注意深く観察しながら戻ってくると、首を傾げている。弟がポンポン背中を叩くと、思い切り抱き着いてきた。

「あ、ありがとうございます……」

「う、わ……ちょっと」

(うわ! あ、当たっちゃってるよ……)

レンが思うのも無理はない。ぴったりくっついた女性の柔らかさが、服越しによくわか

ったからだ。

「お、落ちついて……」

「怖くて……怖くて……」

言葉も聞けないようで、女性はさらにくつついてくる。髪から発せられる甘い香りに、くらりと視界が揺れる。

「おい、レン！ 離れろ！」

その声にレンは素早く身をよじり、女性から離れた。

「あ！ ど、どうして……」

「兄さん、わかってるよ」

女性は二人の戦士に挟まれ、困惑したような表情になった。

「今ここにいる危険な奴は、目の前の淫魔だけだってことはね！」

その声に、女性は驚いたような表情を浮かべた。

「な……」

「その匂いに気付かないとでも思ったのか？ ぶんぶんさせやがって」

ケンが剣を構え、笑った。

「……あなたたち、まさか……」

「〈退魔戦士〉だよ。お姉さん」

レンがそういうと、女性は顔をうつむかせ、そう、と呟いた。

「ふふふ……あはは……」

女性の声と共に、森の小路の雰囲気は一変する。

息さを伴う生温かい空気を取り囲み、周りの音が引いていく。世界が隔絶される。

女性の髪の毛が緑に変わり、地面からツタが生えてくる。黒い翼が服を切り裂く。

顔立ちのはっきりした顔に、笑みが広がった。

「ならもっと好都合。その練りに練った美味しい精液……ワタシにくれるかしら？」

女性——否、正体を現した淫魔は舌舐めずりをしながら笑う。服が裂け、鎖骨から谷間、おっぱいがまろび出た。肌にはシミはなく、下半身には柔らかな白いドレスをまとった淫魔。

そして、地面から生えたツタは、淫魔の脚に巻き付いた。

「植物の魔を受けているのか……」

レンは距離を取り、剣を抜く。柄の頭の部分に丸い鏡を付けた剣だ。兄が淫魔を挟み同じく剣を放つ。弟のより僅かに短く、反りが強い二刀。柄には鏡。

「あら、兄弟二人とも剣士のようなね……その物騒な方を閉まって、美味しい方にしない？」

淫魔の優しそうな顔とツタの間から見える乳房に、思わず興奮を感じる二人。

「誰がそんな事に乗るか！」

レンは一喝すると、目の前の淫魔に斬りかかった。

伸びてきたツタをためらいなく両断する。

「あらやるわね、このっ！」

淫魔は悔しそうに叫び、次から次へとツタを放ち、ムチのようにしならせる。うなりを上げたそれは——しかし当たらない。

「随分単純だね！ その程度、僕らには効かないよ！ とんだ雑魚に会ったかな？」

一本の剣で踊るように切り裂き、叩き落とした。

「雑魚ですって?! 子供退魔戦士の分際で生意気ね！」

淫魔は怒りの表情を浮かべ、次々とツタを放っていく。

地の利を生かした戦法だが、ケンには泰然と構え、二刀の先まで油断なく感覚を巡らせる。いつでも飛びこんで、切り裂いてやるぜ——若くとも鍛えられた戦いの感覚。

「こんな攻撃だけなら、もう終わらせるよ！」

「な、受けるだけで精一杯の癖して……きゃっ?!」

歯ざしりした淫魔が、ツタを網のように大量に放った。

しかしツタはどこにも絡まる事なく——若き戦士は淫魔に肉薄していた。

「……この……！」

(行ける……!)

レンは勝利を確信し、一気に刃を突き立てるため跳んだ。

「止めだ——っ!?!」

だ、その刹那、淫魔の顔に笑みが浮かんだ。

レンの視界は反転し、逆さになって淫魔の顔を見ていた。

見ると、脚にツタが絡みついている。

「くっ……?!」

「ふふ、バカね。ツタは地面の中を通れないと思った？」

とっさに振り返れば、レンの後ろからツタが二本、地中より飛び出している。

「い、今まではわざとか! このっ……離せ！」

「あはは……離すわけじゃない！」

「レン！」

ケンが叫ぶが、ツタが何本も地面を這っていて、うかつに飛び込めない。

「そこで見てなさい。あなたのおバカな弟ちゃんの精液を戴く所をね」

淫魔は白の美しい腕を伸ばし、レンの頬を撫でようとした。

「この！」

剣を振りまわして抵抗するが、返って淫魔の反感を買ったらしい。

「もう、せっかく愛してあげようと思ったのに。ならいいわ。直接チンポを愛してあげる」

「なっ、やめっ……うわっ! ああっ！」

ツタが動き回り、レンのズボンを引き裂いた。

「あ、もう勃起してるじゃない……何よ。勇ましかったくせに、実は精液を抜かれたかっ  
たってわけね。かわいいじゃない♪」

「ち、違っ！ あっ……」

すぐさまペニスにツタが巻き付き、ズルズルと竿をはいずり回りはじめる。

「ああっ……！」

レンは悔しそうな顔になったが——切ない声を上げるしかなかった。

周囲に甘くけだるい空気が流れ、退魔戦士なのに鼻息が荒くなってしまふ。

淫魔との戦いに敗れてしまえば、行きつく先は淫魔に精を捧げる栄養源。

「可愛い声ね。もっと聞かせて」

「あっ、このっ！ あ、ああっ！」

ツタは粘着質の液体でヌメヌメとしていた。ザラザラとペニスの裏筋を根本から舐め上  
げられ、レンは抑えられず嬌声を上げる。

「剣の方も抑えておいて、と……ふふ、美味しそうな予感がするわ……」

剣を持つ両手にもツタが巻き付き、レンは見動きが取れなくなってしまう。

「や、やめっ……ひいっ！」

ツタが服の間から入りこみ、胸板、うなじ、背中、手の甲を舐めまわしていく。

身体中がネットネットになり、戦士そのものから甘い匂いが広がる。

「うっ、ああっ！ だ、だめえ！」

「女の子の声ね……かわいい♪ 増々気に行ったわ」

「レン！」

ケンの声だ。ツタの壁の間から聞こえる。

緑色の壁の向こうに、焦った表情の兄の顔が見えた。

「に、兄さんっ！ くっ……」

（どうにか、剣を……）

レンはツタに引っ張られている剣を握りしめ、チャンスをうかがう。

「さて、本気を出すわよ」

「ほ、本気……？」

咄嗟の宣告に、思わず唾を飲み込む。

「あら、期待しちゃった？」

「何をっ……」

「ふふ。さあ、かわいい声を聞かせなさい……」

淫魔の笑みの後、ペニスに絡みつくツタが細くなり数が増えていく。  
額に浮かべた汗は、役に立たなかった。



ツタはペニスを木に見立てグルグルと絡みつくくと、根本から亀頭まですっぽりと覆った。「さあ、回転を始めるわよ……」

レンの焦り顔を愉しそうに見やり、舌なめずり。

「や、やめ……んあ！ ……っつ、ああああんっ！」

ツタはグルグルと回転を始め、根本から亀頭までを舐め回し始めたのだ。

ジュルジュルと音を立て、ペニスの裏筋やカリ首にしびれる快感を走らせてくる。

堪えようと思ったが——ツタ責めの快感に声を上げるしかなかった。

「どう？ ツタのザラザラと樹液が混ざって気持ちいいでしょう？ チンポがビクビク跳ねてるわよ？」

抑えつけられているペニスは優顔に似合わず逞しく、血管を浮かべて興奮を訴えていた。

ツタが滑り回るたびにビクンビクンと脈打ち、腰を震わせツタを揺らす。

「だめだめだめえ！ やめてえ！」

「精を出すまでやめませーん。ほんと、弱い淫魔のフリするのは嬉しいわ。逆回転も行ってみる？」

淫魔は顔を振りたくって快感を堪えるレンに向かってせせら笑うと、ツタの回転を変えた。ペニスの上から下へと抜けるような動きに代わる。

亀頭が、ザラザラとしたツタに頂点から根本まで絡みつき、回されていく。

「んひゃあぁっ……!!」

気持ちの良い穴にひたすら押し込んでいくような快感に、レンの口から涎が零れた。

若き退魔戦士の嬌声を樂しげに聞きながら、淫魔はビクつくペニスに顔を近づけ、匂いを嗅いでくる。

「あ、忘れてた。タマタマも揉んであげるわね？」

レンは首を振ったが、無慈悲に太めのツタがゆっくりと股に忍びよる。まるで花開くようにツタは先端を開くと、二つの袋を頬ばっていく。

「このツタにはね、舌がついているのよ」

「し、した……？」

レンが問いかけるように呟くと、淫魔は口を開き、自らの舌を見せる。そしてペロ、と舐めるように動かすと——

「うひっ!! ああっ！」

その感触がレンの陰のうを襲った。

「ほら、すごいでしょ？ だからこうして……」

淫魔が舌をぺろぺろと上下に震わせると、ツタから生え出た舌がそれと全く同じ動きをやり、レンの袋をびちゃびちゃと音を立てて舐め濡らした。

（まずいっ！ まずいっ！ 早くしないとぉ……！）

快感の嵐に襲われながら、レンは剣の柄の丸鏡を見る。淫魔が口をすぼめて吸引するよな顔を見せつけて来ると、ツタがそれに合わせて袋を一遍に吸い上げた。

「ううう！ だめえ！」

レンは情けなく口をすぼめて快感によがる。そこにズルリズルリと回転を続けるツタが絡まり合い、快感が昇ってくる。

「ふふ、いたただきませす♪」

淫魔がいやらしく微笑むと、鈴口の敏感な所をザラついたマッサージされながら、袋が一遍吸い上げられていき——

「あ……ああっ！」

（で、出るうっ……！）

レンの視界が明滅した。激しい解放感と、射精の快感が背中を駆け廻っていく——

「素晴らしいわ……！ 美味しい精……！ もっと、もっと頂戴！」

レンは射精していた。



ツタを白く濡らし、回転を施されたペニスがさらに精を迸らせていく。切ない快感をどうする事も出来ず、おもらしをするみたいにジユブジユブと精を溢れさせ、吸わせていた。

淫魔は恍惚を浮かべながら、退魔戦士の精を味わっていた。

（ああ……僕、イツちゃったんだ……！　く、悔しい……！）

このままずると行けば快感の奴隷になるか、一生この淫魔の慰み物だ——

「レン！」

そんな思考に囚われた時、ケンの声が響き、レンは我に返る。

「何よ。お兄ちゃんは後からちゃんと——」

「見ろ！」

「え……あ——！」

その声で、レンは自分の剣を確認する。光っている——！

「な、何を……？」

淫魔が事態を飲み来ず、一瞬たじろぐ。その隙を逃さなかった。

「〈祝印〉！」

剣の柄にある丸い鏡が先を映した。そこに映る兄を見ながら、レンは叫んだ。

「——良し！」

ケンの声。ケンの持つ二刀が俄かに赤らみ、周囲の温度が上がる。

「なっ?!　この、動くのをやめなさい!　さもないと……」

淫魔の声より早く、ケンは一足でツタの壁に寄り、二刀を袈裟に振った。

「あああああ!」

醜い悲鳴が響き渡ると、刀の前にあったツタが両断され燃え上がる。

緑色の壁は瞬く間に消え、逆さづりになった弟へと近づく。

「ふん！」

脚を絡めていたツタを裂き、レンは宙へと放り出される。

ケンは弟の無事を待たずして突っ込む。

苦悶を浮かべる淫魔の、その白く美しい乳房に一刀を突き立てた。

「あっ……ぐう……！」

「勝負あり、だな」

「……そ、そうみたい、ね……」

胸に突き立てられた剣を茫然と見る淫魔。口から血を流しながら、力の抜けた顔になる。

「なぜ……??　あなた達はまだ〈祝印〉を使える程では……しかも、どうしていきなり炎の……」

……私の、最も駄目な物を……」

疑問の声を上げる淫魔のツタは、先から燃え上がり始めた。

「そうだな、冥土の土産で教えておいてやるよ」  
刀を抜き、ケンは息をゆっくりと吐く。

「一人が相手の属性を見抜き、最も有効な〈祝印〉を相方に授ける。それが俺達の祝印だ」  
「な、そんな……聞いた事が……ないわ……」

淫魔は驚いた表情を浮かべたが、やがて笑った。

「そういう事だ。言い残す事は以上か？」

ケンは両腕に力を込める。赤く輝く双刀をクロスさせ、淫魔を見た。

「ふ、ふふ……面白そうね……あなた達、若くて……でも、あなた達も運はないわよ」

「何？」

「だって、この土地は……まあ、いずれわかるわよ……」

ケンはそこから先を聞くのを辞め、力を込めた。

クロスさせた刀で、胸を×の字に切り裂く。淫魔はそこから燃え上がった。

「あなた達なら……ぶりに……方の……と……い……れいに……なる、わ」

燃え上がりながら、淫魔は何かを言った。だが、意味はわからなかった。

淫魔はそのまま、全身を炎に包まれ消えた。

カランと、緑色のリングが落ちた。

辺りの空気も元に戻り、気付くと太陽は傾きの度合いを増していた。

+

「……兄さん、ごめん。まさかここであんな強い淫魔と会うなんて……」

「気を付けろよな。一応、ここがそうなんだからよ」

淫魔に溶かされた服を代え休息を取りながら、レンは笑う。

「兄さんはさすがだよ……」

「何言ってるんだ。お前だってやれば出来るんだからよ。まあ！ 今は俺の方が上だがな」  
（く……でも、いつも兄さんにはかなわない……）

いつも兄にはかなわない。少しの悔しさを覚えながら、レンは言葉をつづけた。

「それにしても……あいつ、最期何を言ったんだ？」

何か言っていたのは聞こえていた。ただ、意味がわからなかった。

（けど、考えても仕方がないや……それに、ここに残るのはなんか恥ずかしいし……）

出来る事なら、自分が不覚を取った事は早く忘れたい。

「とにかく、早く行こう」

そういうと、レンは荷物をひっぱりあげた。

「お前なあ！ 俺が助けたって言うのによ！」

「それはもうすごい感謝しているよ。ただここで休んで夜野宿。ここでふんばって夜ベッド。どっちがいいって話じゃないか」

「……わかったよ」

ケンもだるそうにはあるが、素直に荷物を肩に負った。まだ街は見えない。

だからその淫魔の言葉は、誰にも届かなかった。

+

「……どうやら今日、街の近くでミヨが召されたようですわ」

その広々とした屋敷には、大きさに見合った高さの天井がある。

そこには神と天使、そして足元にすぎる人間が舞う天蓋画があった。だが十字架も地獄も描かれておらず、側面の壁はただ黒く塗られていた。オルガン奏者の後ろには木製の長椅子が等間隔に置かれ、祈りの場であるように見えた。

天国を模した天井を貫かんばかりにのびるパイプオルガン。その音色に耳を傾けていた女性が、演奏が終わるとゆっくりと口を開いた。

「まさかミヨが……退魔の者が街に入ったという事でしょうか。ミヨがやられたのは驚きですが、退魔が入るのはよくあることではございませんか？」

奏でていた楽器から離れた青髪のメイドが言った。おかつぱに揃えられた青髪の下で、長いまつげと青い瞳が輝いていた。すらりと華奢な脚を動かし、音もなく歩いた。

「でも、ミヨはどうやら〈祝印〉でやられたみたいですよ」

その言葉に、メイドは目を見開いた。

「では……教会認定の退魔戦士という事ですか？」

「ええ、それもどうやら二人も」

「二人……それはもしかして、ついに教会がルア様を……！」

「わからないわ。私を捕まえる事にしたのかしら……ずっと我慢していて、捕まえる精は少なくしていたといいますが」

その言葉に、メイドは微笑んだ。女性は長椅子から立ち上がり、部屋を後にする。沈まんとす太陽の焦げるような赫に彩られ、その笑みが浮かぶ。

「たまたまなのかしら。それとも本当に私を倒しに来たのか確かめないとはいけませんわ。ふふ、どうやら愉しい時間が過ぎせそう」

淫らな悪魔の笑みを浮かべ、女性は部屋を出た。

## 2 古都 フィーニス

夜、ガヤガヤと活気あふれる酒場に双子の退魔戦士は居た。

荷物は酒場の二階にある宿に置いてある。ゆるりと羽根を伸ばす事のできる時間だった。

「大きな街だね」

「田舎にしちゃ、といった所だな」

兄弟はこの街の感想を言い合う。日没ギリギリで到着できてほっとしていた。

道中は他の魔物や淫魔に遭遇する事はなく少し拍子抜けしたが、どうせ金にもならない低級しかいない。

あの淫魔のリングを役所へ持っていくと、やはり〈A級〉の淫魔だった事が確認され、当分は金に困らない程だ。

街は城壁に囲まれ、中に小高い丘がある。街の首長はその頂上に住んでいるとの事で、豪商や古い貴族は丘に屋敷を構え、一般人や兵士たちはその周囲に住んでいた。

「お二人とも遠い所から来られたそうで。ご苦労様でございます」

「ありがとうございます」

忙しく女中達は動き回っているが、カウンターの中央に居る主人らしきバーテンはゆつくりと喋っていた。けして動きが遅いわけではなく、むしろ洗練されていて無駄がない。

「この街は片田舎にありますが、交通の要所でもありまして、いつも活況に満ちております」  
細い目と白く蓄えたひげの下で静かに動く口に、ケンは何月を感じていた。

「マスターはここにずっといるんですか」

「いやいや、今から三、四十年程前になりますかな、三十でここに来た時に、そのまま居座るようになりました」

「……って事は七十近いのか？」

驚いたようにケンは言った。

「健康だけが取り柄でしょ」

「若い時に鍛えていたんですね」

レンは関心して言った。まさか七十に近いなんて。

「ゆつくりしていただくさい。ここはリーフェルト様が治め、治安もいい場所ですから」

「リーフェルト？」

ケンはコーヒーカップを傾けながら言った。マスターは薄く微笑んでいた。

「ルア・リーフェルト様。旦那様が亡くなってから、この街を治めていらっしゃる方です」  
女君主というわけか。珍しい。

「あなた方のような方が来るのは珍しい街ですから、情報も少ないでしょうが」

「どうしてですか？　ここは交通の要所だと」

尋ねると、マスターはコップを拭きながら、

「退魔戦士の方は、何の大物も居ないここには来ません」

頬笑みを浮かべるマスターに、二人は驚いた顔を浮かべる。

「伊達に生きてはおりません。姿とその纏う気配を見れば。祝印を纏うていらっしやるとは、若いのに相当にお強い。どうでしょう、この用心棒など」

「いえいえ、それ程じゃないんです。まだ成り立てで」

「なんと！ ではまだ〈A級〉でもない？ 確かにとてもお若い……」

驚いたマスターは声を上げ、レンは困ったように頬を掻いた。

「ですがそうでしたらなおさら、今後に期待がかかりますな」

「はは、どうも……」

「お、お待たせしました！」

「どうも。っと、これは違いますよ？」

「あう！ ごめんなさい！」

女中が何やら間違えて物を運んで来て、レンが優しく返した。

しばし、会話が途切れたが、女中が早脚で三人から離れた時、マスターは口を開いた。

「淫魔の情報は、こういう所に集まります。旅のハンター様や、王国の専門部隊。あなた方のような教会認定の退魔戦士もよく来られます」

「まあ、有名な奴を倒せば賞金は出ますから」

レンはそう言いながら、ジャケットの内ポケットに手を突っ込んだ。

「質問したいのですが、本当にここは大物がいないのでしょうか」

「どういう意味でしょうか？」

マスターの質問に、頷いてレンは答える。

「僕たちはずっと、ある淫魔を探しているのです」

「ほうそれは珍しい。それはビンゴブックに載っている程なのですか？」

「いや、載ってないさ。けれど相当強いはずだ」

ケンが言いながらコーヒーを飲んだ。

「なるほど、協会が認定していない淫魔……それはなぜ探されているのです？」

「少し事情があって。どうしても僕たちで倒したいのです」

ふむ、とマスターは頷いてグラスを棚に戻す。そこは几帳面に清潔に保たれていた。

「復讐でしょうか」

静かな言葉に、二人は何も返さなかった。正しくは返せなかったというべきだろうか。

「それはやめられた方がいいかと思えます」

「なんでだ」

ケンが呟いた言葉に、目を閉じながらマスターは言う。

「淫魔とは人を墮落へ誘う悪魔です。美しく艶やかな、しかし終わる事のない悪夢のような存在……何があったかは訪ねませんが、もう一度その悪夢を見ようなどと思わない事です。次出会えば醒めない夢の中に誘い込まれてしまうかもしれません。お二人とも他の淫魔を倒す事で立派に責務を果たしているかと思えます」

年を重ねたマスターの言葉に二人は何も言い返せず、しばしの間沈黙が流れた。

「すみません、出過ぎた事を」

「いえ、大丈夫です。もともと会えるとはあまり思っていないから」

「まあ、ついでに探して行くくらいのレベルさ」

二人が冷静だったためか、マスターも安心したような笑みを浮かべていた。

やがてすべて食事を済ませると、ケンは一立ち上がり、

「少し風に当たってくる」

と言って外へと出た。

「ありがとうございます。僕も外へ行ってきます」

「わかりました。お部屋に戻られる時は裏よりどうぞ」

レンもまた領き、外へと続いていく。

静けさが広がる酒場で、マスターが呟いた。

「憎いと思っている相手を、実は恋焦がれている事もありますゆえ」

「どうしました？」

「……いいえ、独り言です」

マスターはゆっくりと店の裏へと消えた。

「兄さん」

レンが追い付いた時、ケンは街の真ん中にある噴水に腰かけていた。

「やっぱり中々見つからねえな」

「そうだね。気長に探そう。それこそが僕たちが戦士になった理由でもあるんだし」

「マスターには止められたけどな。まったく何言ってるのか」

「確かにね」

二人で笑い合う。マスターの言葉は難しく、二人には理解しきれなかったのだ。

「それにやっぱり強い淫魔もいないみたいだし。ここに居てもしょうがないかもな」

「そうだね。早く次の街に行って、もっと強くなりたいと……」

「じゃあ次はどこに行くか相談するか。ここから山を越えたら、淫魔との戦いが激しい所もあるっていうし」

ケンは立ちあがり、伸びをした。笑いながら脚を宿に向けようとした。

「面白い話じゃねえか。お二人さん、強い淫魔を探しているのか？ 金目当てか？」



その時、不意に二人に話しかける男が現れた。

「誰だ」

ケンがそう言い放ち、身構える。

「俺はタツだ。面白い話を聞かせてやる」

二人より十五は上だろうか。男は、黒い髪を夜風に揺らしながら言った。

——淫魔。

いつごろか現れたのかは定かではなく、悠久の遙か昔から人間を陥れる魔物としてあった。美しい女性の姿をし、人間の精を好み、襲った。

さらに、彼女らは植物や水といった自然の力の魔を身に宿し、その猛威をふるった。

武力で男の刀を折り、寝床で男の心を溶かす。誘惑に負け精を捧げてしまえば最後、死ぬまで吸い取られるか、性の奴隷として飼われる一生を過ごすことになるという。

女が襲われると淫魔にさせられた。数知れぬ多くの者が絶世の美女、そして魔の姿をした淫魔に襲われ、精を捧げた。

そこで人間は教会の元に集い、退魔戦士を育成した。武術を鍛えるのはもちろん、鋼の精神を持つ男達を育てあげた。そんな人間達の努力が届いたのか、神は〈祝印〉を人間にさずけた。それは人間の精神力、忍耐力を高める力を持ち、さらに一部の強者には、淫魔と戦う時に非常に有効な武器となる力も授けた。

こうして、退魔の力を得た人間は、淫魔との戦いを太古より繰り返して来た。気を抜けばすぐに村一つが吸いつくされるなど、決して戦いが消える事はなかったが、誇りを守るべく、退魔戦士達は戦っていた——

「なんだ、お前？」

「退魔戦士、淫魔ハンター達の情報屋だよ。ビンゴブックの作成、新聞作成とか、色々やってるぜ」

差し出された紙には「退魔連絡協会」と書かれていた。

「協会の方ですか？ もっと普通に名乗ってくださいよ」

「いいじゃねえか。なんせ若い二人に会えるなんて、めったにない事だからな」

タツは笑いながら言った。

「退魔戦士成り立ててで〈祝印〉を使う兄弟退魔戦士だろ」

タツは肩をすくめながら言った。

「で、強い淫魔を探しているんだって？」

「強いというか、ビンゴブックに載っていない淫魔を探しているんです」

「どうしてだ？」

「昔、生まれ故郷をそいつにやられたんだ」

ケンがポツリというとき、タツは静かに目を閉じた。

「そうか……聞いて悪かったな……どこか人に聞かれない所に行こうぜ。何かの助けになるかもしれない情報があるんだ」

半信半疑の二人だったが、今はとくに当てもなく、話を聞いてみるのもいいと思った。

「古いが、悪くない所だな」

酒屋の二階。まっすぐ立つのもギリギリの高さの部屋で、タツは木製の椅子に腰かけ一冊の本を取り出した。

「〈踊る青き寶石〉  
ブルー・ソフィア

出したのは一冊の古びた本だった。

「宝探しには興味ないぜ」

「またの名を、〈月下の妖艶なる貴婦人〉」

タツがそう言った時、二人はタツの顔を見つめた。

「二つ名ですか？」

「非常に強い力を持つ淫魔にだけつけられる二つ名、確かにそれに似てるな」

「だが二つ名は一つだけだぜ。どうして二つも」

「いや、〈指揮棒を振る女主人〉なんてのもある。一体なんのことかはわからねえが」

タツは一度ことばを区切り、水を飲んだ。

「聞き覚えのないのばかりだけど……ひよっとして、その淫魔がこの地方に流れて……」

レンは眉をひそめた。だが、タツはかぶりを振り笑うと、

「この地方に昔居た、聖人の呼び名だ」

「聖人？」

ケンは、はあ？ という声を出し肩を落とした。

「ああ。一体なんでそんな名前を付けたのか知らんが、この街の協会は、この聖人、名前は聖ルアリアというらしいんだが、そいつを崇めている」

ケンはベッドに身を投げて天井を見つめた。

「なんだよそりゃ。聖人になって興味ねえよ」

「お前教会お抱えなのにそれはダメだろ……」

「確かに兄さんの発言はだめだけど、僕達の目的とは合わないね」

ケンは顔をしかめたが、誰も気付かなかった。タツはうなずき、続ける。

「確かにこれだけじゃ何も関係はねえよな。だが、この街に強力な淫魔が現れないのは、その聖ルアリアの加護のおかげだと、この街の住人は信じてるみたいなんだ」

「そうなんだ……さすがにこの街の聖人までは知らなかった」

「で、その聖人様が、何の関係があるんだ？」

「タツはそこで前のめりとなった」

「教会ビンゴブックには、何個か欠番がある」

「タツの声のトーンは一段落ちた。その声に釣られて、レンの声も小さくなる」

「その淫魔がずっと現れなかったり、戦士と相打ちになった後、他の戦士が淫魔のリングを見て確認が取れない時だね。討伐したかはわからないけど、もう脅威ではないから、それは賞金の対象から外す」

「そうなのか。お前は勉強してるんだな……長きってのはどれくらいなんだ？」

「百年」

「ひゃく？」

「素っ頓狂な声がケンからあがった」

「ああ、そして淫魔の特徴は永久に変わらないから、強力な淫魔の判断も付きやすい。だから一度使った番号は永遠に使わないんだ」

「じゃあ、もしかしてここに……欠番の？」

「レンは目を見開いた。そうか、今、ここに強力な淫魔が居なかったとしても、昔、居た可能性はある」

「参照は永久に可能だからな。教会が発足したのは今から五百年前。その辺りで登録された一匹の淫魔が欠番として記録されている」

「……五百年前？ そんなもん、もともと欠番だらけじゃねえか」

「そんな前の記録なんて、全てが疑わしい。番号の重複だけはないが、そこになんの淫魔が記録されていたのか、わからないケースもある」

「ああ。だが、こいつは残ってる。二つ名は、〈乳魔〉だ。一番始めの方だから名前が凝ってねえ。わかりやすいだろ」

「〈乳魔〉……」

「戦う前から、特徴がありありと思いつかせる事ができる二つ名だった。まだ戦い始めたばかりの退魔戦士たちを苦しめた淫魔の姿」

「……その、五百年前に欠番になった胸のデカイ淫魔が、何の関係があるんだ？」

「ケンは何か考えるように腕を組んでから言った。タツはその言葉に、もう一冊の本、いや、雑誌を取り出した」

「俺はこれでも昔、〈A級〉の退魔戦士だった」

「そうだったんですか？」

「急な告白に、二人は驚いた。タツは笑いながら上着の内ポケットを探り、ネックレスを取り出した」

「ドクタグ……！」

裏に識別の番号が刻まれ、二つとないタツだけの番号が刻まれていた。

「返さなくてもいいからな。戦士の証だ」

「まだピンピンしてるのに、どうしてやめたんだ？」

「俺は〈祝印〉を使う事ができなかった。適性がなかったんだ。なのにどんどん与えられる任務の敵は強くなってきてな。ある時戦いで負けて慰み者になって、もうだめだ——って時に助けられたんだ。限界を感じて辞めたよ。」

くそ、あいつら、俺たちの事を精液タンクぐらいしか思ってねえし、さんざんバカにしてくるが、一度ヤラれちまうと本当に止められないんだ……」

「止められないって……」

レンが問いかけるとタツは笑いながら言った。

「お前らだって若いんだから興味があるだろ？ 戦士になったんだから、儀式の時に巫女からやられるだけじゃねえか。そこからは淫魔に負けでもしないかぎり出来ないんだからよ」

「でも、あんな苦しい物を……好き好んでなんてさ……」

「そうだぞ、さっさと終わってほしくてたまらなかったぜ」

レン達退魔戦士は戦士になる時に協会の巫女に最初で最後の性行為を行ってもらい、戦士として精の力を「武器」に込めるのだ。それ以外では行えなくなるので、もし次に行くようになった時は引退した時か、淫魔に囚われ犯された時だけである。

「そうか？ 最近ちょっとでも不覚を取られた時はなかったのか？ もう感想が変わってる頃だと思っただけだよ」

そういわれて、レンの顔は赤くなった。

「助けたりするだろ？ 淫魔に囚われてしまった奴らとかさ」

「助けるさ。でも、彼らは淫魔に負けて禁忌を犯した裏切り者だ。理解できないよ」

「ああ。その通りだな」

淫魔を助けた時に、奴隷となっていた戦士達や男を助ける事がある。

だがそれは、淫魔の協力者になる絶対の禁忌を犯した奴らなのだ。同情する事は出来ない。

それに何より、あの幸せそうな顔。

「あげく間違ってるのはこっちの方だ、なんて言うからな」

二人には目に焼き付いているのだ。故郷を滅ぼした淫魔達、そしてそのリーダーであるあの淫魔……村の戦士を何人も屠った魔女を。

「そうか。淫魔に街を滅ぼされたって言うんだからな。悪かった。俺の身の上話はナシだ。そのおかげで、ツテつかって取材も特集も組みやすいでな」

タツは雑誌を掲げた。中は退魔戦士が特集されているらしく、インタビューや最近の戦い等が取り上げられている。ゴシップに等しいが、戦意高揚には一役かっていた。

「最近、進んで快楽に身を任せちゃう奴らも多いから……特集がこれ」

〈秘蔵・退魔戦士行方不明マップ!〉

と書かれた特集には、どこから情報を抜いたのか、戦死も無事も確認できず消えた者達のリストと、その最後の場所が記されていた。

「やられちまえば戦士もただの男も同じ、ご主人様ーって言って淫魔から離れようとする奴になっちゃうからな」

「何人も見てきたよ。そういう人達を」

レンは嫌悪感を込めて言った。彼らにとって、それはもっとも嫌いな姿の一つなのだ。

淫魔の精奴隷になった男達。淫魔を倒す中で何人も見てきたが——あの呆けた顔——

見る度に村の出来事を思い出してしまう。

「取材でこの街に来た時。その聖ルアリアの話聞いて、思い出したんだ」

タツが指さした所、それはここフィーニス一帯の地域だ。

数は少ないが、何人かの戦士が行方不明となっていた。

「でも、他の所より少ないぜ。流れの強力な淫魔にぶつかっちゃったんじゃないのか」

ケン気なしに呟く。そう考えるのが普通だろう。だが弟は違った。

「いや……これ……」

「ん、どうした？」

「気付いたか、弟は頭がいいな」

ケンがわからず、レンに促すと、レンはゆっくりと言った。

「他の地域では〈B級〉や〈A級〉の退魔戦士も行方不明になっているけど、ここは〈S級〉しか行方不明になってないよ」

「なっ？」

今度はケンが驚きの表情を上げ雑誌をひったくった。ろうそくの明りに三人が集う。

「そう、えりすぐられた戦士達がだ」

「じゃあ……まさか……」

レンは息を飲んだ。遙か昔の欠番淫魔〈乳魔〉と、いくつもの〈二つ名〉を持つ崇められし聖人。そして行方不明者のリストと、この近辺に強力な淫魔はいないという事実。

「どういう事だ、レン？」

「まだわかんねえのか、顔は似てるのに出来が違うすぎるだろ」

「な、失礼だな！ その分戦士として戦闘は俺の方が上な所はあるんだぜ」

「え……今は聞き捨てならないな、兄さん。冗談でもそういう事は言っちゃいけないだよ」

「ここで説教かよ？ いいぜ、やるなら……」

「どっちでもいいだろ。喧嘩するなよ……」

タツが呆れたように言い、ケンはふざけ半分掴みかかったが、レンの表情は硬かった。

「いいかい兄さん。ずっと昔から……ここ一帯は〈淫魔〉に支配されていたかもしれないんだ」  
「な……?」

レンの心の中に去来したのは、一つの可能性だった。  
もし、この眉唾モノの考えが事実で悠久の時を生きる〈乳魔〉があの時村を襲った淫魔だったとしたら。

多くの淫魔を指揮し、村の皆を絞りつくしたていたとしたら……

タツは頷き、言葉をつづけた。

「ここに、街の教会がまとめである。この件に関しては教会を信じる事はできねえ。明日二人で回ってきてくれ。俺はもう少し調べを進めたい」

「どこに?」

「この街には古くからの貴族が居るからな、家の伝説とか残っているか、聞いてくる」  
タツはそう言い残し、約束を決め、部屋を出て行った。

「手掛かりが出来たな……」

「そうだね」

その日、二人はそのまま眠る事にした。

どうやら、この街にはビンゴブックに載っていない強敵の淫魔がいる可能性がある。

### 3 選択

「お湯加減はいかがでしたか」

「とってもよかったわよ」

その言葉にメイドは微笑んだが、すぐに表情を変えた。

「どうやらまた嗅ぎまわっているようですよ」

その声を聴き流しながら、女主人は金色の髪を夜風に乾かしていた。

絵画の中にあるのが相應しい。そんな美しい金髪で、主人の肢体と合わせると、気品と色気を兼ね備えた芸術作品になるその姿に、メイドは内心嘆息した。

「バレていないとでも思っているのかなーあの男ー」

「そこが退魔戦士はかわいいんですわ……覚えておきなさいルリ」

そう言っって頭をなでる。

「でも、あんな低い精を召されては、ルア様のお体に触りますっ」

メイドの言葉にも、女主人は笑った。

「使命と誇りを捨てて快樂に墮ちる精は、どれも美味しい物です。とてもね……私が直々に聞きましょう。ルリと共に準備を始めなさい」

主人の指示を聞き、赤い髪のメイド、ルリは頷いた。聞き終わると早速動き始める。

「ルア様に召し上がっていただけるとは……なんて運のいい奴！」

その言葉は、主人には届いていなかった。

+

(空振りか……?)

タツはそうぼやきながら貴族の家を出た。

朝から聞きまわっていたが、どれもこれも特に目立った伝説はなく、特に知りたい部分に関しては、特にほかの伝説と変化なかった。

「最後は、首長のリーフェルト家か……」

朝会った女性を思い出し、タツは笑った。

初めに一番上から行こうと思いい立ち一番で尋ねたが、出てきたメイドにすげなく突っ返されそうになった。歴史特集と言ったのはだめだったか。

だが、そのメイドの後ろから出てきた女主人が快く受け入れてくれたのだ。ただ今は外せない用事があるので、日没の辺りに来てほしいと言われた。

『ありがとうございます！』

『私も歴史には興味があるんですわ。ぜひいらしてください』

ドアが閉まるまで頭を下げ続け、閉まったらガッツポーズをした。

「それにしても、すげえ美人だったな……」

ルア・リーフェルト。金髪が良く映えていて、垂れ目の瞳は水色に輝いていた。右目の下には泣きホクロ。優しい笑みを浮かべ、どこかに出かけるつもりだったのかパープルのドレスを纏っていた。

ドレスは肉体のラインがわからないように大き目に作っており、腰の所もゆるく動きやすいデザインだ。

それでも中にひそませている肉体の美しさ、起伏の激しさは想像して余りある物だった。

「つといけねえ、ゴシップ記者じゃないんだからな」

気を取り直し、丘へと進む。交通の便が悪く、馬車は家主達が自分で持っているものだけだ。

日没で辺りが薄暗くなった頃、三階建の大きな屋敷へとたどり着いた。

「リーフェルト家はここいらで一番古い家系だ……期待できるな」

期待を込めてノッカーを叩くが——返事がない。

用事が長引いているのだろうか？ 灯りもついていない。

「約束をすっぽかすような人じゃなさそうだったが」

辺りを見回す。人気はなく、音もしなかった。

「くっそ……収穫なしか。二人に悪い事したな」

ため息を付きながら見上げる。

本当に大きな屋敷だ。よく手入れされ、あの女主人に相応しい美しさだ。

「……ちよつとぐるつとするくらい、バチは当たらねえか」

門番もいないのはこの街が安全だからか？ 他の屋敷には居たし、少し不用心じゃないか？

そう思いつつ、回る。屋敷は大きく、横に回ってしばらくすると中庭が見えた。中庭には大きな噴水があったが、水は張ってはいなかった。

「あれは……？」

中庭に面した部屋の一室だろうか、オレンジの明りがついているのがわかった。夜に慣れてきた目を凝らすと、

「なっ？」

タツは息をひそめた。いや、遠い、何かの見間違いかもしれない。まさか？

(どうする……？)

タツは中庭を見まわす、花や木を植えているので、丸見えではない。確認することはできるかもしれない。

そつと、中庭の敷地に踏み込んだ。慎重に辺りを見まわし、メイドも居ない事を確認する。望遠境を持って来なかった事を後悔しつつ、壁に寄りながら進んだ。

「んっ……ん……」



「あひっ……おっ」

微かに、声が聞こえる。オスとメスの声。窓が空いている。やはり、揺れていたのはランプではなく、女主人の肉体だ。

窓とは反対を向いている。それは誰だって行う事だし、これだけならタツはただの犯罪者だ。だが違う。タツは確信があった。一瞬だが明かりに照らされ、その背中が見えたのだ。

（まさか……だが……）

待て、待て、と言いつ聞かせる。これは出過ぎだ。一度引くべきだ。その予兆だけでいい。それがあると伝える事が大事だ。

そっと中庭を半分の半分程まで進んだ所で、タツは窓から視線を外し、振り返った。

「……？」

噴水に近づいていたので、その中が見える。綺麗に掃除されていたが、水を受ける甕の上の方に、微かに白いラインがついていた。

（何を入れてるんだ……？ いや、早く……）

その時だった。

不意に、中庭の門が閉まった。

（なっ？）

ボタンという音共に、先ほどまで女主人が居た窓も閉まった。

タツはとっさに走った。門を乗り越えるべく手を伸ばし……

「うわ！」

高い門にかけた手を、何かに振りほどかれた。

「だめですよ。勝手に入っちゃ」

「あ……め、メイド……」

門の上にはメイドが座り、箒でタツの手をはたいたのだ。

「メイド？ 私にはユリネって名前があります。失礼ですね」

そう言いながら、朝あつた感情のない顔からは想像もつかない妖艶な頬笑みを浮かべた。

「くあっ……!?!」

そして、辺りの雰囲気が一変する、

この感覚、久しぶりの感覚だった。淫魔と対峙した時の辺りの空気が一変する、この感覚。

「まさか……お前が……」

その言葉に、ユリネは笑った。

「まさか！ あなたのお目当ては後ろですよ」

門の反対側に視線を流したユリネ。タツが振りかえると、

「あ……あ……」

一変したはずの空気が、さらに変わった。

まだ十分に離れているはずなのに、むせ返るような色香が、辺りを支配した。

「勝手に人の家に入るなんて、少々失礼ですわよ？」

「お、お前……ま、まさか……」

ゆっくりと近づいてくる女主人はバスローブを纏い、口調とは異なり優しげな笑みを浮かべていた。人型の淫魔——サキュバスだ。

「ふふ、でも、そう来ると思ったから、こういうセッティングを施したんですけれどね」

両手を広げ、笑った。

たわん、と乳房が揺れた。

釣鐘型の美しいそれは、大きさに反して重力に逆らう奇蹟の造形をしていた。バスローブの間から浮かび上がる谷間は深すぎて、一度迷えばもう出て来るのは叶わないような程の深みだ。尻の丸みとくびれと合いまって、強烈すぎるコントラストを浮かべている。だが決して下品ではない。それらが無駄のない引き締まった肉体とシミ一つない肌に覆われ、金髪をなびかせながら主人は近寄ってきた。

「に、〈乳魔〉……」

「あら、ご存知ですね。でしたらお返しするわけにはまいりませんわ。たっぷりとお話、聞かせていただけますか？」

「そ、それは……でき……ねえな！」

タツは帯刀していた剣を抜き放つ。構えると距離を取り、伝説の淫魔の攻撃に備える。

(くそっ……)

立っているだけなのに、近くにいただけなのに。

タツのペニスは勃起しきって、カウパーを垂れ流していた。

(だめだ……こ、こいつは……)

「ふふ」

「……っ……」

ぱさりと音がして、乳魔はローブを取った。若さと熟れた女の両面を併せ持つような顔が、タツを見つめて来る。金髪の間から小さな折れた角を生やし、黒々とした翼を広げた。

美しいふとももの部分から、黒い薄布にびっちりと包まれていた。大きな胸は下着状の布で、股間の部分も極限まで面積の小さい物で守られていた。

(……目が……そらせねえ……)

その挑発的すぎる肉体を眺めながらも、剣を構える。

「勝てたら、逃がしてあげますわ……ただし……負けたら」

両手を覆っていた黒革のグローブが形を変え、巨大な刃を両腕から生やす。

「ちっ……上等だ……」

「ふふ、上等ですって」

門の上からメイドがクスクスと笑う。

「あの二人のボウヤの事、喋っていたいただきます」

「負けたら人を売るとでも？」

タツの言葉に、淫魔は笑った。

「ええ……あなたから喋るのよ」

刃と化した両腕に、たわわな乳房を乗せ、揺らした。

ズボンの中でペニスが脈打つのを止められなかった。

「快樂欲しさにね……」

その声と共に、翼をはためかせ、中空に舞う。刃を交差させたまま乳魔ルアがタツへと迫る。

（くっ……なんとか逃げてやるぜ……！ 待ってろ！）

「舐めるなよ！……化け物が！」

タツはその叫びと共に、刃を構え突進した

十

「まったく、これじゃ本当に片田舎に来た観光客じゃねえか」

ケンには、だるそうな声を出しながら、遺跡の柱だった石塊に腰を下ろした。

「兄さん！ それは貴重な文化財で……」

「しるかよ。二百年も前に店じまいした教会なんて今の俺達には関係ないね」

二人がタツと会ってから二日経っていた。昨日も今日も天候には恵まれ、実際遺跡の周りには地元の人々が昼に一休み、と羽を伸ばしにきていた。

「でも、タツさんはどこに行ったんだろう」

「怖くなって逃げたんじゃねえのか？」

「まさか。失礼だよ」

冗談だよ、と返しながらケンは石塊の上に寝そべった。

ケンとレン。戦士として最も力のある年頃にはまだ早い、若手のホープだった。

二人の性格は反対。恵まれた体格を二人ともしているが、ケンはその性格から、見た目よりも大きく、レンはその思慮深さと大人しさから見た目より華奢に見えた。

実際ケンの方が少し大きいので、双子と言えど並び立つと差は分かった。二人とも優しい顔付きなのは変わらない。

「でも、この教会は本当にこの聖人を祀っているんだね」

城下、城壁周りの広い土地にポツン、ポツンとある教会は、とても一日では回れなかった。

だから二日目の今もこうして回っている。予定では今日はタツと共に周り、成果を教えるという事だった。

だが約束の時間からだいぶ過ぎても、彼は現れることはなかった。  
「見てよ」

二人が居るのはかつて礼拝場だった所だ。石が散乱し、まだ草原に立ち続けている枯れた柱の間に、野ざらしにされた壁画が、壁ごと残っている。

「それが聖ルアリアなんだろう？ 余程胸に目がいったんだろうよ」

ケンという言葉には理由があった。

壁画には中心に祈りを捧げている聖人の姿が彫られていたのだが、彫られている輪郭を正確に辿れば、修道着の胸の部分が、少し横に膨らんでいた。

「他の時代の奴も、今現存している奴も、少しこの特徴があるね」

「そうなると、ますます〈乳魔〉との線が疑わしくなってくるよ……」

「そうだな」

レンの言葉に、ケンは同意した。

「けどよ、そうなると本当に〈乳魔〉がああ淫魔かもしれないな」

二人にとって絶対に消せない記憶。脳裏に焼き付けられた光景。それを果たす機会が、思いがけず訪れるかもしれない。

「勝てるか？」

「兄さんが弱気？ 珍しいね」

レンの言葉に、ケンが聖人の画を見上げながら返した。

「レンの説が本当なら、仮に応援を呼んだ所で教会は助けに来ちゃくれないぜ」

その言葉に、レンは何も言い返さなかった。しばらくの間、風の音が聞こえるだけだった。

「……だからって、僕は諦める気は無いよ。もしこの考えが本当だったとしたら、僕は兄さんが逃げてでも戦いを挑む。村を、皆をやられた借りを返すんだ」

レンはいつもの優しい表情を消し、決意の表情になった。

「……そうだよな。安心したぜ。レンが気弱になっちゃいいところは全部俺が一人占めだ」  
それを見て、ケンが笑みを浮かべ立ちあがった。石を掴み、聖人の顔に向かって投げつける。

「昔の奴ら達なんかより、今の俺達の方がよっぽど戦闘技術も進んでいるし、〈祝印〉をうまく扱える」

幸い周りに村人はおらず、聖人に唾吐く行為を見とがめられる事はなかった。

「決まりだね」

「ああ」

二人は固く握手をし、気合を入れる。二人に授けられた〈祝印〉の影響か、風が渦を描くように旋回し、草が舞う。

翌日タツとの集合場所に向かう事にして、その日の探索は打ち切った。

+

「んはっ……んはぁ……あぁっ……」

「ふふ、すっかり気に入ったみたいね。いい顔じゃない」

若き二人の退魔戦士兄弟が誓いを立てた同時刻、フィーニス丘の頂上にある大きな屋敷の一室では、乳魔による淫猥な尋問の儀が執り行われていた。

締め切られた室内は濃いカーテンが日光を完全に遮断し、むせ返るような暑さがそのまま閉じ込められていた。

性に目覚めたばかりの少年なら卒倒しかねない甘い香りが充満し、部屋に居るサキュバスと元戦士の男の肌に玉の汗を浮かべさせる。

「それで？ 教会はその双子にこの街に来るのを辞めるように言ったのね？」

「は……はい……そ、そうです……きよ、教会は強い敵はここにはいないから行くなと……あ

あ！ あぁん！」

その回答に金髪のサキュバス ルアは舌舐めずりをした。貴族を偽るときの優しそうな顔は消え、淫媚な笑みを浮かべて男を見やっていた。

「あ……すごっ……ひっ」



痙攣するようにヨがる男にすでに戦士の面影は無い。ブランクのありすぎた元〈A級〉にとつて、目の前の悪魔は淫らにすぎた。

(なんだよこれえ……こ、こんなあ……)

中庭に誘いこまれた後、タツと乳魔の戦いはそう長く続く事はなかった。身体を弄ぶように痛めつけられ尻尾で絞めあげられた後、次に目覚めたときにはもう逃げ場はなかった。

口が、舌が、手が、肉体が、ペニスが、全てタツを裏切り、目の前のサキュバスの肉体に白旗を上げた。逃げる事もできず、白旗を上げたタツに、淫魔はタツに無力さを思い知らせるように責めた。口、手、胸、脚、足、言葉、中。

何度イカされたのか、何度精を捧げたのかわからない。気づけば赤くはれ上がって勃起しきつたペニスを谷間に囚われ、心をへし折られ、捧げていた。

「いいわ……故郷の敵を討とうとする若き兄弟退魔戦士。しかも〈祝印〉が使える……」  
その言葉に、タツの背筋が快楽以外のモノで震えた。

「ほんとにいい、ほんとに……」

「それはボウヤには内緒よ」

「オウツ!？」

笑みと共に手を使い谷間をぎゅつと締める。

「さあ、聞きたい事は全部聞かせてもらったわ」

「あつ、ハッ……アアツ!？」

淫魔は胸を操る手の動きを早め始めた。

「あつ……ああー!」

激しい快感と絶頂の瞬間、そして命の危機を感じてタツが腰を反りあげる。

両手でシーツを必死に掴むが、夢い事だった。

「んっ……んっ……ふふ、最高の快感でイカせてあげる」

「アアツ! スゴツ! ……アひイ!」

(だめだ……イク……ふ、二人とも……)

激しく肉がぶつかりあう音と、グチュグチュという粘った水音が部屋に響く。

限界まで追い詰められていた牡が、二度と戻れない絶頂に付きあげられようとしていた。

「おひいっ……ッ!」

だが、タツの顔はだらしなく緩み、涎と涙をこぼしながら快感を貪っていた。

元戦士の自分が精を淫魔に捧げている事も、誘惑に負け兄弟の情報売った事も、この快感と比べたら、安い物だった。一度これを覚えこまされてしまったら、きつとどんな使命も誇りも恨みも理由も、この快感を味わうためだったら悦んで投げ捨てる。

イク。

もうすでに誇りも理性も運ばれている。後はこの欲望にまみれた肉体と本能が飛ばされれば

「イグツ……！ イグううあああああつああ！」

ひとときわ高く反り上がった腰と牡の絶叫。小さく微笑む淫魔。

「……最高の快感と共に、眠りなさいボウヤ」

優しい声で乳魔が言った。

（二人とも……来ちゃ……だめだ……）

タツの意識は二度と戻らない所へ、快樂と共に運ばれた。

「決まったわ。ユリネ」

興奮が冷めやらないのか、淫魔は冷たい笑みと口調のままメイドに告げる。

「はい」

「二人のボウヤを招くわよ。この〈乳魔〉ルアの屋敷に」

「どうしてですか？」

「私直属の〈淫魔戦士〉になってもらうわ」

「まあ！ ですがその〈退魔戦士〉達は、ルア様が憎くて仕方がないはずですが」

「……だからこそ堕ちた時、それはそれはかわいいボウヤになるのよ」

「……彼らも運の良い……でも、どうやって？」

「何一つ隠さず、正直に誘うのよ」

「ああ……はい……胸がぞくぞくしますわ」

——こうして、双子の若き退魔戦士は、最も淫らで美しき淫魔の屋敷サキュバスに招かれる事になる

その日の夜、一人の男の遺体が街で見つかった。